

台湾の意味景観調査に向けて Towards a Survey of Semiotic Landscapes in Taiwan

森下 美和

Miwa Morishita

神戸学院大学

Kobe Gakuin University

miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

Abstract

This research focuses on a survey of semiotic landscapes in Taiwan and reports on the results of its analysis, noting similarities and differences with similar surveys conducted in various parts of Japan as well as in the English-speaking, multi-ethnic city of Melbourne and other cities in Australia. The author has been conducting her research with the expectation that she will learn about the various approaches to well-being in daily life in Taiwan, where people seem to have a high level of awareness of health and the global environment.

Keywords — Semiotic Landscape, Multilingual Translation, Non-native Expression, Tourism

1. はじめに

著者は、2021年度から2022年度にかけての在外研究の一環として、オーストラリアと台湾で調査・研究を行ってきた。オーストラリアではシドニー、メルボルン、ブリスベンという最も人口が多い3大都市、台湾では首都である台北ならびに著者が訪問学者として滞在する国立清華大学のある新竹の2都市を中心に言語景観調査に関するフィールドワークを実施するというものである。具体的には、路上の案内表示（道路標識、注意書き、お知らせ）、店舗内外の表示（メニュー、求人案内）などに見られる言語表記を記録・分析している。

当初は、台湾の国立清華大学を拠点として、オーストラリアの複数の都市でのフィールドワークでデータを収集し、主に英語学習用の教材開発の準備とする予定であったが、台湾は新型コロナウイルス感染症拡大防止措置として各種ビザの発給を停止していたため、日本国内での待機を余儀なくされた。その後、オーストラリア政府が、2021年12月より日本、韓国、シンガポール、ニュージーランドの4か国からの入国を認めたため、まずはメルボルンでフィールドワークを開始することにした。オーストラリアについてはオンライン申請によるETAビザ(3か月間有効)での入国であったため、2022年3月下旬にいったん帰国し、再び国内待機となったが、6月になってようやく台湾の訪問学者用停留

査証(visitor visa)を取得することができた。6月下旬にブリスベンで開催される学会で、本研究に関連する口頭発表を予定していたため、再びオーストラリアに入国し、ブリスベンとシドニーでフィールドワークを行い、7月初旬にオーストラリアから最終目的地である台湾へ移動した。

言語景観調査は、著者が代表となっている科研費採択課題のテーマであり、昨年度からの在外研究の内容とも関連している。在外研究以前および在外研究期間の国内待機中には、主に日本国内での調査を行ってきたが、上述したような状況を経て、現在は海外での調査を精力的に進めている。本発表では、台湾の言語景観調査に焦点を当て、これまでに同様の調査を行った日本各地の言語景観や英語圏の多民族都市であるオーストラリアのメルボルン他での調査との類似点や相違点を挙げつつ、比較・分析した結果について報告する。

2. 台湾の概要と現状

台湾の面積は九州よりやや小さい36,000平方キロメートル(日本の約10分の1)で、人口は約2,340万人(日本の約5分の1)である。著者が主に言語景観調査を行っている台北市は、首都でありながら、その人口は新北市(400万人)、台中市(281万人)、高雄市(273万人)に次ぐ第4位(249万人)で、第5位には古都である台南市(186万人)が続く[1]。各都市で異なる特徴も見られると予想されるため、今後、台北市内のみならず、台湾高速鉄道が結ぶこれらの大都市についても調査を試みる予定である。

新型コロナウイルス感染症拡大直前の2019年の訪台外客数は約1,184万人で、2018年の約1,107万人から7%の成長を見せた。日本人旅行者と韓国人旅行者の数はいずれも過去最高で、前年比でそれぞれ約10%および20%の成長率となった[2]。しかしながら、台湾では2022年7月現在もなお、新型コロナウイルス感染症拡大防止措置として観光目的の入国は制限されているため、台北の中心地であっても基本的にインバウンド観光客はい

ない。

これまでの調査では、公的・私的を問わず、言語表記の多くが中国語（繁体字）のみであり、店舗の場合は英語ないしは日本語との2言語表記もしくは中国語（繁体字）・英語・日本語の3言語表記が多く、インバウンド観光客用の表記が新型コロナウイルス感染症拡大以前のままになっていると思われる。日本における公的な多言語表記では、日本語・英語・中国語（簡体字・繁体字）・韓国語の5言語が併記されていることが多いが、台湾では簡体字および韓国語などその他の外国語表記についてはほとんど見られない。

2019年の日本からの訪台者数は約217万人、台湾からの訪日者数は約489万人であったと報告されている[3]。物理的・心理的な距離の近さも手伝ってか、お互いの往来が激しいことが分かるが、特に台湾の場合は、およそ5人に1人が日本を訪問しているという計算になる。人口比から考えると、日本からの訪台者数は現在のおよそ10倍であってもおかしくはないという期待があるかもしれない。インバウンド観光客としての日本人を受け入れるだけでなく、自らがインバウンド観光客として日本を訪問する人が多いということは、当然言語を含めた日本の文化になじみがあるということであり、多言語表記において日本語が第2または第3の言語として扱われているのも不思議ではない。

著者は中国語（繁体字）が分からないので、音声翻訳機（ポケトーク）のアプリをスマホにダウンロードしたが、現在までのところ、なかなかうまく活用できていない。現状では、観光ガイドブックに掲載されているような日本人に人気のある店舗であっても、日本語表記が見られないところが多い。また、中国語（繁体字）に英語や日本語が併記されている場合でも、間違っていることが多いので、中国語（繁体字）の漢字からも意味を推測しながら理解することを試みている。今後、観光目的の入国が可能となれば、台湾の言語景観にも大きな変化が見られる可能性が高い。

同じアジア圏に属し、日常的に漢字を使用しているにもかかわらず、台湾ではアルファベットを使用する国に比べて言語の面で不便を感じる人が多い。そのため、これまでの経験や知識を総動員して理解しようとしていることに気付く。その点で、これから本格的に開始する台湾の言語景観調査については、これまで著者が使用してきた「言語景観」よりも、言語も含めた「意味景観」という呼び名がふさわしいかもしれないと考え、本発表タイトルに反映させた。

3. 台湾の言語景観

ここでは、2022年7月現在までに台湾で収集した例をいくつか紹介する。

1) 録影中請微笑

中国語（繁体字）を知らない場合でも、この文が「収録中は笑顔をお願いします」というような意味であることはある程度推測できるが、併記されている英語が'Video Surveillance'であることに驚いた。中国語（繁体字）の母語話者によると、非常に一般的なフレーズであり、店舗などでは顧客に対してあまり厳しい口調にならないように、このような表現を使っているとのことである。10年ほど前までは、「録影中」「録影中、請自重」などのようにもっとストレートに表記されていて、警察署などの政府機関では現在でもこれらの表記が使われているようである。機械翻訳では取り扱うことのできない文化的背景を持つこのような例が、他にもあるか気になるところである。

2) 「～の～」

「普普の風」「布の屋」「孟季の原作」など、平仮名の「の」を使って一見日本語のように見えるが、実際は何のことか分からない例をよく見かける。森下(2022)は、オーストラリアのメルボルンにおける調査の中でも、'fresh pancake'の意味であると思われる「鮮の芙蓉」という表記を紹介しており、一般的に日本人が提供するモノやサービスは高く評価されているため、日本人が経営していることを（実際にはそうでない場合が多いようではあるが）アピールするような例であると指摘している[4]。

4. まとめと今後の展望

上述したように、台湾の言語景観では、中国語（繁体字）、英語および／または日本語という表記が多く、英語と日本語については、かなり正確なものから怪しいものまでさまざまである。英語については、台湾においては非母語である点で日本と同じ状況であり、その誤用には母語の影響が見られるのではないかと想像できる。日本語を母語とする著者と中国語（繁体字）を母語とする共同研究者たち（国立清華大学の Professor Jason S. Chang とその研究室のメンバーなど）の間で、今後この点について議論する予定である。

森下(2021)は、外国人居住者の多い地域の言語景

観調査について報告しているが、特定のコミュニティ向けの言語表記がほとんど見られない理由として、コミュニティ内で情報共有がなされており、それ以外の情報がなくても日常生活が完結する、日常会話レベルの英語や日本語ができるなどの可能性を指摘している[5]。さまざまな歴史的、文化的背景を持つ台湾では、地域によって居住者の使用言語・学習言語に特徴が見られる可能性がある。これらの居住地域で、どの言語がどのように使用されているかを探るとするのも興味深いテーマである。

現在、台湾で暮らす外国人からの生活に関する相談を受け付けるフリーダイヤル(1990)では、日本語、英語、中国語(24時間年中無休)に加え、ベトナム語、インドネシア語、タイ語、カンボジア語の計7言語に対応している[6]。これらの手厚いサポートは、日常生活において困難を抱えている非母語話者が多いことを意味するのであろうか。2021年10月現在、台湾における在留邦人数は24,162人であると報告されているが[7]、日本人を含む外国人居住者に言語景観に関するインタビューを行うことも検討している。

最後に、本オーガナイズドセッションのテーマである'well-being'について特に意識しながら、今後、台湾で調査を進める予定であることを付け加えておく。台湾では、漢方薬販売店やマッサージ店など健康にまつわる店舗が非常に多い。通りの至る所で苦茶や青草茶などの漢方養生茶が販売されており、「甜品店」と呼ばれるスイーツ専門店でも、雪花氷(台湾風かき氷)や豆花(豆乳プリン)などのトッピング用として、ハト麦、キクラゲ、仙草、ナツメなどの健康食材が並ぶ。また、著者の知る限り、日本では服のリサイクルボックスはアパレル会社の店舗内ぐらいでしか見かけることがないが、オーストラリアと台湾では通りでよく見かける。これらのことから、台湾では、健康や地球環境に対する意識が高いことが予想され、生活の中でwell-beingに関するさまざまな取り組みについて学ぶことができるだろうと期待している。

謝辞

本研究は、科研費基盤研究(C):課題番号20K00822『英語教育に生かす言語景観研究:誤用分析と異文化コミュニケーションの観点から』(研究代表者:森下美和)、科研費基盤研究(C):課題番号22K12598『言語景観観察に基づく文化情報伝達の研究及び応用:掲示から文化認知へ』(研究代表者:平松裕子)の助成を受け

ている。

また、本発表に先立ち、著者の収集したデータについて、早稲田大学の原田康也先生、京都工芸繊維大学の坪田康先生と議論を重ねたことが大いに参考になった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

参考文献

- [1] 公益財団法人日本台湾交流協会(2022)「台湾に関する基礎知識」
<https://www.koryu.or.jp/publications/knowledge/>
- [2] TAIWAN TODAY(2020)「去年の訪台外客数は過去最高の延べ1,184万人、各国・地域からバランスよく成長」
<https://jp.taiwantoday.tw/news.php?unit=152&post=169034>
- [3] 外務省(2022)「台湾基礎データ」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html>
- [4] 森下美和(2022)「メルボルンの言語景観調査:コロナ時代の観光都市」電子情報通信学会『信学技報』, vol. 121, no. 440, TL2021-41, 50-55.
- [5] 森下美和(2021)「観光都市の言語景観:神戸から海外へ」電子情報通信学会『信学技報』, vol. 120, no. 427, TL2020-22, 24-27.
- [6] フォーカス台湾(2022)「台湾在住外国人向け相談電話、7月から「1990」に日本語対応は年中無休」
<https://japan.focustaiwan.tw/society/202206270002>
- [7] 外務省(2022)「海外在留邦人数調査統計」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html>